





叢書・同時代の詩Ⅲ

詩集
野の舟

昭和四十九年八月十日印刷
昭和四十九年八月十五日発行

著者 清水 昶

装画 駒井哲郎

装幀者 田辺輝男

発行者 中島隆之

発行所 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の六
電話(〇三)(二九)三七一一
振替 東京一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社
製本 中西製本印刷株式会社

定価は函・帯を御覧下さい

目次

闇の中から 8

おれたちは深い比喩なのだ

10

病気 14

塔 18

聖五月祭 22

二〇歳 32

柩 36

少女Mの死 40

ひまわり——冬の章 44

死の年代記 52

遠い血のために 62

野菊 66

背中だけの男 70

朝焼けの日に 74

血縁紀行 78

野の人よ白夜に眠れ 90

ひまわり——夏の章 96

素足で歩いてきた者の伝説

暗夜への旅 108

野の舟 112

詩集

野の舟

闇の中から

ねえ ぼくらは

どんな深い闇に親しんでいるのだろう

火が恋しい 古代人のように歩きまわって……

老いることもとくに忘れてしまったさ

しっかりと目蓋を閉じれば

たちまち浮きあがってくる藁の夏

笹舟がきらめく

河のなかで少女の性器がひかっている

竿を投げよ 小さな船長！
ふなかし

一瞬にして去りゆくものを

どうしてぼくらは焦がれるように大切にする？

手の汚れ口の汚れ

やわらかな舌で油も切れがちだ

だから深夜にひっそりと両眼をとりだして

すみきった水で洗ってみたり

毎日 泡をふいてくらしている敵たちのあいだを

水しぶきをあげながらよぎってみたりする

そこまで洪水が来ているというのに

だれだ！

亡霊のぼくらのとなりで

まだ歯を鳴らしているやつは

おれたちは深い比喻なのだ

垂直に考えぬくおれたちのなかに

どんなにするどい杭を打ちこんだとしても

音もなく落下する

美しく乾燥した老母が落下する

若い女が恋に狂って落下する

パンと革命が落下する

おれたちは深い比喻なのだ

そして

毎日きまつた時刻に

一頭の馬がめくらの男を乗せ

明澄な朝を目ざして

おれたちのなかから旅だつ

闇から闇へと老いてゆく男を乗せて

虚妄にひかる馬一頭が

夜の未来を踏みしめてゆく

めくらの男と馬の行手に

たぶん

殺されるために生きのびている覚悟がある

封じられるために語る口がある

遮断ばかりのめくらの迷路で

あらゆる鉄の扉はゆがみ

肉のう치가わをこじあけて

古くから組織されていた死者たちが
いっせいに反乱の叫びをあげる

一瞬

おれたちは

棒立ちになったまま

比喩の底に残っていた

最期の水をのみほそうとする欲望に

猛りはじめる

比喩としての死を

くりかえし生きている

ま昼の沈黙の

まんなかで！

病氣

雨がくらやみをたたきはじめた

どこかで鳥が鳴いている

東京の夜鳥たちが……

わたしは待つ

一日の筋肉をひっぱり

繋ぎ目のない縄をひっぱって帰ってくる老父を待つ

火のような髪をほどき

淫蕩な性をほどいてまっしろな老母を待つ